

ライヒスバンクの信用構造について

——金融資本成立期を中心に——

松 田 清

は し が き

本稿の課題は、「ドイツ 金融資本成立期におけるライヒスバンクの信用構造」を究明すること、である。この課題を果たすべく我々は、主としてライヒスバンク公式統計資料の分析を手掛にして、以下の順序で考察を進めてゆきたいと思う。

まず〔Ⅰ〕では、(1)ライヒスバンクの貸出業務における手形割引の比重、(2)ドイツの手形割引業務全体におけるライヒスバンクの比重、が確認される。特に(2)を問題にするのは、ライヒスバンクの手形割引業務と他の金融機関（殊に市中銀行）のそれとが、同時代人によって競争関係にあるものとして意識されていたばかりでなく、現実には一定の競争関係を形成していたからである。

次いで〔Ⅱ〕では、〔Ⅰ〕の確認に基づいて、ライヒスバンクの内国手形割引業務に立入った分析が加えられる。ここでは、(1)ライヒスバンクは „Bank der Banken” であると同時に „Bank für Handel und Industrie” でもあるということ^{注)}、(2)その結果ライヒスバンクの手形割引業務はそれが対象とする業種（特に銀行業と工業）と地域（特にベルリンとライン＝ヴェストファーレン）とに応じて際立った差異を示すということ、が確認される。

〔Ⅲ〕では、ライヒスバンク割引手形の質が検討される。ここでの中心論点は、〔Ⅱ〕で確認されるようなライヒスバンク手形割引業務の

業種的・地域的特性が、「手形の質」という問題とどう関連しているのか、という点である。

最後に「むすび」において我々は、以上の作業によって検出されるライヒスバンク内国手形割引業務の諸特徴を総括し、「ドイツ 金融資本成立期におけるライヒスバンクの信用構造」の論定を試みたい。そしてそれは、「ドイツ 金融資本に対するライヒスバンクの関係」をも、ある程度明らかにすることになるであろう。

注) この点に関して A.I. ブルームフィールドは次のように述べている。

「ほとんど例外なく、1914年以前の中央銀行は一般公衆と規則的な商業銀行業務を行なったし、また、若干の場合には、ひじょうに大規模に行なった。このことは、これらの銀行をして国内いたるところにあるかれらの広範な支店網によって、商業銀行とある程度の直接的競争にみちびいた。」
「しかし、時期がすすむにつれて、中央銀行業務の商業銀行的側面は商業銀行および他の金融市場機関の急速な成長と、ほとんどの国で進行した銀行集中化の動きとによって相対的にも絶対的にもその重要性を低下させる傾向にあった。しだいしだいに、中央銀行は主として『銀行の銀行』となる傾向にあったが、それでも、これらの銀行のほとんどにとって商業銀行業務操作は1914年にいたってもなおけして無視できなかった。しかし、このことに関して、信頼するに足る統計上の情報はほとんど存在しない。」(A.I. ブルームフィールド『金本位制と国際金融』(小野——郎・小林龍馬共訳) 日本評論社、1975年、16ページ)

ここでブルームフィールドが述べていることは、勿論、ライヒスバンクにも妥当すると言ってよい。だが問題は、ライヒスバンクの「商業銀行的側面」(我々はさしあたりこれを „Bank für Handel und Industrie” と表現している) の中味なのであり、これと「銀行の銀行」たる側面との質的關係なのである。以下我々は、「統計上の情報」を分析して、

第1表 ライヒスバンク貸出額およびその各構成項目の比重の推移

	手	形	ロン	バード	証	券	合	計
		(A) $\frac{A}{D} \times 100$		(B) $\frac{B}{D} \times 100$		(C) $\frac{C}{D} \times 100$		(D) 伸び率
1891～ 1895年	554	84.9	91	13.9	8	1.2	653	19.6
1896～ 1900年	724	87.2	94	11.4	12	1.4	830	27.1
1901～ 1905年	840	84.5	73	7.4	81	8.1	994	19.8
1906～ 1910年	995	80.3	91	7.4	152	12.3	1,239	24.6

注 1) 絶対額は各年の年末残高を合算して5で割った数字である。単位は百万マルク。

2) 「伸び率」は対前期伸び率である(%)。

資料: Die Reichsbank, Die Reichsbank 1876—1910, S. 14 より作製。

ライヒスバンクの「銀行の銀行」としての側面と「商業銀行的側面」との「量」と「質」を明らかにするであろう。

〔I〕 ライヒスバンク

手形割引業務の比重

(1) 貸出業務における手形割引の比重

ライヒスバンクは、①手形割引³⁾、②ロンバード貸付、③証券の買取、の三つの経路を通して信用を供与する。これらは同行の貸借対照表では „Anlage” の科目の下に個々に計上されている。いま „Anlage” (以下「貸出」と呼ぶ) の年末残高総額およびこれの各構成項目の量的推移を概観すれば、第1表のようになっている。

見られるように、貸出残高総額は、この間5年毎にほぼ20%前後ずつ増大して、期間の終りでは初めに比べて2倍近くに達している。そこでこの内訳を見ると、ライヒスバンクの信用供与において圧倒的な比重を占めるのは手形割引を通じるそれである。1896～1900年間にそれは貸出全体の9割近くを占めてピークに達し、以後、この期間に比べれば比重は低下していった(とはいえ、1906～1910年期間でもなお8割を占める)が、絶対額では依然として増大を続

けた。手形割引業務のかかる比重の大きさは、固より、1875年銀行法が正貸以外には割引手形のみを発券準備として認めている、という事情によっても規定されているのである。

手形割引に比べると、ロンバード貸付²⁾は量的にはほとんど問題にならない。貸出残高総額の急激な増大の中で、ロンバード貸付残高は唯一停滞ないし減少を示し、このためその比重は著しく(14%→7%)低下

することとなったのである。

他方、証券の買取による信用供与は、1890年代には極めて低い比率しか占めなかった(1%台)が、1900年以降急増してロンバード貸付を凌駕し、1906～1910年期間の平均で貸出残高総額の12%強をなすに至った。

以上のように、量的にみれば、手形割引が圧倒的な比率を占め、残りの2項目は合計しても貸出残高総額の10%余からせいぜい20%程度に留まっていた(その内ではロンバード貸付の比重が低下し証券の買取が急増した)のであるが、質的にみれば、手形割引・ロンバード貸付と証券の買取とが区別されねばならない。というのは、前の2つはライヒスバンク信用が直接市中に流れてゆく経路をなすものであるのに対して、証券の買取を通して与えられるライヒスバンク信用はさしあたり主として国家財政の内に流込むからである。すなわち、ここで「証券の買取」として計上されるものの中味は、大部分国庫証券(Schatzanweisungen)の割引であり、しかもこれが1900年以降急増したのは、この年の暮から帝国政府が巨額の国庫証券をライヒスバンクに割引かせるようになったからなのである³⁾(ちなみに、この項目は第一次世界大戦中にそれこそ莫大な額に達した⁴⁾)。

第2表 各種銀行の割引手形年末残高¹⁾の比較

	各種銀行合計	ライヒスバンク	構成比(%)	民間発券銀行・不動産担保銀行合計	構成比(%)	株式資本百方マルク以上の信用銀行	構成比(%)	信用銀行のうちベルリン6大銀行 ²⁾	構成比(%)
1891～1895年	1,703	631	37.0	313	18.4	759	44.6	332	19.5
1896～1900年	2,511	919	36.6	436	17.4	1,156	46.0	521	20.8
1901～1905年	3,030	1,081	35.7	302	10.0	1,647	54.3	823	27.2
1906～1910年	4,395	1,314	29.9	346	9.9	2,735	62.2	1,326	30.2

注 1) 絶対額の単位は百万マルク。

2) Deutsche Bank, Dresdner Bank, Disconto-Gesellschaft, Darmstädter Bank, Berliner Handelsgesellschaft, A. Schaaffhausenscher Bankverein の6行(1910年末における割引手形残高の順)。

1) ライヒスバンクの手形割引業務についてはライヒスバンク当局の解説がある。Vgl. Die Reichsbank, Die Reichsbank 1876-1900, S. 75-104.

2) ロンバード貸付とは、証券・手形・商品を担保とする動産担保貸付のことである。担保物件の比重で見ると、証券ロンバードが圧倒的に大きく、1890年代には90%を越えていた。これは公債消化のために1884年以降実施された公債ロンバードに対する優遇利率の適用によるもので、1897年にこれが廃止されてからはこの比重は徐々に低下していった(1910年で75%)。これに替わって増加したのは手形ロンバードであって、1895年に2%にすぎなかったその比重が1910年には20%に達したのである。商品ロンバードの比重は4～7%の低い水準にあってほとんど大きな変化を示していない。Vgl. Die Reichsbank, Die Reichsbank 1876-1910, S. 168f.

2) Vgl. Die Reichsbank, Die Reichsbank 1876-1925, 1. Teil, S. 19.

3) Vgl. ebenda, 2. Teil, S.13.

(2) ドイツの手形割引業務におけるライヒスバンクの比重

上に述べたところから明らかなように、ライヒスバンクの対市中信用供与に関する限り我々はほとんど専ら手形割引業務を問題にすればよいのであるが、その場合同行はドイツの各種銀行の割引く手形の内どれだけの分量を占めてい

たのか、これを次に確認しておこう。

第2表¹⁾は、ライヒスバンク・民間発券銀行²⁾および不動産担保銀行・株式資本百方マルク以上の信用銀行³⁾・ベルリン6大銀行のそれぞれの割引手形年末残高(各5年間の平均)とそれらの合計に対する各々のパーセンテージとを示したものである。一見して明らかなよう

に、信用銀行の手形割引業務が急速な拡大傾向にあるのに対して、民間発券銀行および不動産担保銀行のそれは比重において著しく低下し(18%→8%)、絶対額においてもむしろ減少しており⁴⁾、ライヒスバンクのそれは絶対額では増大傾向にあっても比重では低下傾向を示している。この表には明示されていないが、1890年まではライヒスバンクの割引手形残高の方が信用銀行のそれよりも大きかった。ところがこの年に信用銀行の残高が一挙に1億マルク以上増大し、これ以後、信用銀行がライヒスバンクを上回るようになったのである。けれども、1890年代中は、ライヒスバンクやその他の銀行も手形割引業務をかなり拡大したために、それぞれの比重にはさほど大きな変化は生じなかった。これに大きな変化が生じたのは1900年以降のことで、さしあたりは民間発券銀行の絶対的かつ相対的な後退として、次いでライヒスバンクの相対的な後退として、そして一般に信用銀行の絶対的かつ相対的な飛躍的前進として、目立つようになっていったのである⁵⁾(1908年には、ついにベルリン6大銀行の割引手形残高がライヒスバンクのそれを上回ることとなった)。

ところでこの場合、ライヒスバンクと信用銀行——特に大銀行——とでは同じ手形割引業務

でも外国手形の扱いに差があったので、この点注意を要する。ライヒスバンクの場合⁶⁾、外国手形割引は徐々に拡大されつつあったとはいえ、1901～1905年期間の平均でみると、同行割引手形の内、内国手形が 97.9%を占めるのに対して、外国手形はわずか2.1%を占めるにすぎなかった。後者の比重が急速に増大するのは1908年以降のことで、1911年には年末残高基準で15%を越えるまでになった⁷⁾のであるが、1907年まではその比重はなお5%にも満たなかったのである。これに対して信用銀行の場合には、外国手形割引の比重が著しく高かった。O. ヤイデルスの示すところによると、Berliner Handelsgesellschaft の1903年の割引手形の内、実に54.5%が外国手形であったという⁸⁾。他の大銀行はこうした内訳を公表していないが、この比率は、いずれも対外関係を強力に育成していたベルリン大銀行⁹⁾にほぼ一般的に妥当するものとみなしてさしつかえないであろう。地方銀行の場合、この比率ははるかに低い。例えば、Allgemeine Deutsche Kreditanstalt の場合には18.4%であり、Bergisch-Märkische Bank の場合も同様であったと言われる¹⁰⁾。しかしこれでさえライヒスバンクの場合よりはるかに高いのである。

このように、ライヒスバンクの手形割引業務の重点が圧倒的に内国手形割引にあり、信用銀行——特に大銀行——の場合には外国手形の比重が極めて高いのであるから、内国手形割引に限って見た場合のライヒスバンクの比重は、第2表に見たそれよりもかなり大きいものとしなければならないのである¹¹⁾。

1) 次の資料により作製。ライヒスバンクについては、Die Reichsbank 1876-1910, S. 124; 信用銀行については、戸原四郎『ドイツ金融資本の成立過程』付表X; ベルリン6大銀行については、A. Bosenik, Neudeutsche Gemischte Bankwirtschaft, Bd. 1, Anlage IX, S. 256 ff; その他銀行合計については、Riesser, Die deutschen Großbanken und ihre Konzentration, 1911, S. 247f. なお、この他に手形の重要な割引者としては Königliche Seehandlung などが挙げられねばな

らない。Vgl. Somary, Bankpolitik, 1915, S. 174.

2) ライヒスバンク以外の発券銀行の意。

3) ドイツの株式普通銀行にはこの他にも種々の呼称が与えられている。Vgl. A. Fendler, Zur Kapitalkonzentration der Berliner Großbanken von 1914-1923, 1926, S. 8.

4) これは民間発券銀行に起因する。

5) S. ヘランダーは、ライヒスバンクと市中銀行とを比較する場合は、前者の年平均残高と後者の年末残高とを比較しなければならないと主張している (Vgl. Sven Helander, Das Zurückgehen der Bedeutung der Zentralnotenbanken, S. 195)。これで見ると、6大銀行の割引手形年末残高はすでに1904年にライヒスバンクの年平均残高を上回るに至っている (Vgl. ebenda, S. 194)。

6) Vgl. Die Reichsbank 1876-1910, S. 130 u. 158.

7) Vgl. Die Reichsbank 1876-1925, 2. Teil, S. 68.

8) Vgl. Otto Jeidels, Das Verhältnis der deutschen Großbanken zur Industrie, 1905, S. 31.

9) Vgl. h. mit Steinmetz, Die deutschen Großbanken im Dienste des Kapitaleports, 1913 und Gerhart von Schulze-Gaevernitz, Die deutsche Kreditbank, 1915, S. 159.

10) Vgl. O. Jeidels, a. a. O., S. 32.

11) ロンバード業務に関してベルリン大銀行とライヒスバンクとの比較を示しておく、1900年で、ライヒスバンクのロンバード貸付の最高 (12月31日) は約1億5千万マルクであったのに対して、ベルリン6大銀行のそれは2億マルクを越えていた (ルポールを含む)。1910年で見ると、Deutsche Bank 1行で5億マルクを越える残高を記録したのに対して、ライヒスバンクのそれは4億マルクにも満たなかった。

以上の検討によって我々は、①ライヒスバンクの貸出業務の内では手形割引の比重が圧倒的に高いということ、②その手形割引の内でも内国手形の比重が圧倒的に大きかったということ、③したがってライヒスバンクの信用供与の圧倒的に主要な手段は内国手形割引であった (同行割引内国手形残高は貸出残高総額の実に8割前後を占めていた) ということを知った。そしてこれによって、我々の関心がほとんど専らライヒスバンクの内国手形割引業務に向けられる所以もまた、同時に明らかにされたのである。

以下、ライヒスバンクの内国手形割引業務に

について、種々の角度から立入った検討を加えてゆくことにしよう。

〔Ⅱ〕 ライヒスバンク
内国手形割引業務

(1) 割引依頼者の業種別・規模別分布

まずライヒスバンクで内国手形を割引に付した者の業種別分布を平均残高基準で見ると、第3表のようになっている。1905年以前の資料が

第3表 割引依頼者の業種別分布

	1905年		1910年	
	額(千M)	%	額(千M)	%
商業・運輸・保険	174,363	19.9	158,038	18.5
貨幣—銀行業	425,075	48.5	496,654	58.2
工業	249,825	28.5	185,189	21.7
農業	11,854	1.4	6,916	0.8

注 1)「額」は各年の平均残高
2)「%」は構成比
資料：Die Reichsbank 1876—1910, S. 147.

ないためにここでは1905年と1910年との数字だけを掲げてあるが、この2つの数字の関係に見られる一定の傾向は、1905年と1910年との間の諸年にはほぼ妥当しているのであって、1905年以前についてもこの傾向の延長線上にあるものとみなしてさしつかえないであろう。さて、この表でまず注目されるのは、この時期のライヒスバンクは決して „Bank der Banken” たるに留まらない、という点である。たしかに、この5年間に絶対額でも全体に占める比率でも増大したのは金融関係だけであり、他はいずれも、絶対額においても全体に占める比率においても、減少している。しかし金融関係の占める比率は、1905年時点でなお50%に満たず、1910年まで増大を続けてもなお60%弱に達したにすぎなかったのであって、むしろ、1905年=48.4%、1910年=40.2%という商工業の比重の高さの方が目立つのである¹⁾。1905年以前には、金融関係の比率はもっと低く、商工業の比率はもっと高かったであろう。こうしてこの時期のライヒスバンクは、金融関係以外の諸部門との直接取引関係を根強く残存させているという意味

第4表 ライヒスバンク手形割引許容企業・個人数と許容枠上位2ランクの企業・個人数

	ライヒスバンクから手形割引信用を供与されうる企業または個人の数(A)			(A)のうち、その額が101,000～500,000マルクであった者の数			(A)のうち、その額が501,000マルク以上であった者の数		
	1896年	1903年	1910年	1896年	1903年	1910年	1896年	1903年	1910年
商業関係	22,940 (100.0)	26,566 (100.0)	24,128 (100.0)	893 (3.9)	1,084 (4.1)	1,218 (5.1)	56 (0.2)	55 (0.2)	98 (0.4)
工業	15,946 (100.0)	20,294 (100.0)	21,244 (100.0)	1,812 (11.3)	2,525 (12.4)	2,942 (13.8)	204 (1.3)	286 (1.4)	425 (2.0)
農業関係	7,175 (100.0)	9,694 (100.0)	9,854 (100.0)	233 (3.3)	215 (2.2)	218 (2.2)	20 (0.3)	17 (0.2)	17 (0.2)
あらゆる種類の組合	643 (100.0)	884 (100.0)	1,026 (100.0)	73 (11.4)	95 (10.7)	152 (14.8)	3 (0.4)	6 (0.7)	18 (1.8)
銀行	2,269 (100.0)	2,400 (100.0)	2,361 (100.0)	604 (26.6)	675 (28.1)	725 (30.7)	235 (10.4)	302 (12.6)	343 (14.5)
その他	6,079 (100.0)	9,476 (100.0)	8,068 (100.0)	211 (3.5)	286 (3.0)	270 (3.4)	23 (0.4)	20 (0.2)	36 (0.4)

注 1) 1896年4月、1903年8月1日、1910年11月15日の数字である。
2) 支店ないし支社も独立のものとして算入されている。
3) () 内は各段の(A)に対するパーセンテージである。
4) 「その他」はレントナー、手工業者、小営業である。
資料：Ebenda, S. 154f. より作製。

で、なお „Bank für Handel und Industrie²⁾” でもあったのである。

ところで、ライヒスバンクとの直接取引関係をもつ企業または個人（以下簡単化のために「企業」とする）は尨大な数にのぼるが、ライヒスバンクは、それら個々の企業について、それぞれに7つのランクに分けて一定の割引許容枠を設定していた。そこでこの内上位2ランクに属する企業の数を一業種別に示せば、第4表のとおりである³⁾。

見られるように、ライヒスバンクが手形割引を許容している企業の総数では、商業関係が首位を占め、工業がこれに続いており、この2つの部門で全体の $\frac{2}{3}$ 以上に達している。けれども、その内で割引許容枠が10万1千マルクを越える企業のパーセンテージで見れば、銀行（正確には貨幣＝銀行業）が他を圧して首位にあり（1910年では半数近くに達している）、他の業種はこれに遠く及ばないのである。これはこれで、ライヒスバンクから大規模に信用を引出し

うる企業の比率が銀行業において特に高く、他の業種（特に商業関係）では小規模な信用の取り手が圧倒的に多い、ということを示して重要であるが、いっそう重要なのは、むしろ絶対数である。そこで最上位たる50万1千マルク以上の許容枠をもつ企業の数を見ると、工業が425（1910年）を数えて第1位にあり、343（同）を数える銀行業がこれに続いている。ところが、その他の業種はこの2つの部門に比べて最上位にランクされる者の絶対数は問題にならないくらいに少ないのである。

こうして我々は、ライヒスバンクから巨額の信用を引出しうる企業数は圧倒的に工業と銀行業とに集中していた、ということを知る。ただその場合、ライヒスバンクの割引いた手形の内どの程度の分量がこれら最上位にランクされる企業から持込まれたものであったのか、ということは残念ながら直接には知りえない。第5表はこの点についての推測を試みたものである⁴⁾。

第5表 ライヒスバンク割引手形の枚数および年末残高の手形額面別構成

	割 引 手 形 枚 数				割 引 手 形 金 額			
	枚 数		構 成 比(%)		金 額(千マルク)		構 成 比(%)	
	1905年	1907年	1905年	1907年	1905年	1907年	1905年	1907年
200マルク 以下	1,481,712	1,634,107	31.2	30.3	222,257	245,116	2.5	2.1
201～400マルク	940,317	1,051,653	19.8	19.5	282,095	315,496	3.2	2.7
401～500マルク	346,683	382,910	7.3	7.1	156,007	172,310	1.7	1.5
501～1,000 マルク	783,598	889,861	16.5	16.5	587,699	667,396	6.6	5.6
1,001～3,000 マルク	731,358	852,109	15.4	15.8	1,462,716	1,704,218	16.3	14.3
3,001～10,000 マルク	318,188	388,303	6.7	7.2	2,068,222	2,523,970	23.1	21.2
10,001マルク 以上	147,221	194,151	3.1	3.6	4,167,711	6,253,785	46.6	52.6
計	4,749,078	5,393,094	100.0	100.0	8,946,707	11,882,291	100.0	100.0

割引手形の枚数で見ると、その総数は、1905年で475万枚弱、1907年で539万枚強にのぼるが、ここに区分された7つのランクのそれぞれが全体に占める比率は、小口手形ほど高く、大口手形ほど低い（401～500マルクは例外）。そして

400マルク以下の小口手形が全体の 半分近くに達し、1万1マルク以上の大口手形は全体の4%にも満たないのである。

ところが、それぞれのランクの枚数が全体として表示する金額で見ると、それぞれのランク

の比重は枚数で見た場合とちょうど逆になっており、今度は大口手形が、1万1マルク以上のものに限っても半分を占め、枚数で半分程度を占めていた400マルク以下の小口手形は金額では5%程度にしかあたらないのである。

もちろん、割引許容枠50万マルク以下の企業が1万マルク以上の手形をライヒスバンクに持たないとは断言できないであろうし、ましてや50万1千マルク以上の許容枠にランクされている企業が1万マルク以下の手形を取扱わないなどということはないのであるから、ここに区分された手形額面の7つのランクは必ずしも割引許容枠の7つのランクに照応するものではない。けれども、一定の許容枠にランクされる者からの割引において問題になりうる手形の額面にはやはり一定の大きさ（特に上限）があるであろうし、許容枠最高ランクにある者にして中小規模の手形を取扱う部分と中位の許容枠を設定されている者にして大口手形を取扱う部分とはある程度相殺される（多分前者の方が大であろう）ものとみなしうるであろうから、手形額面別に、例えば、1千マルク以下、1千1～1万マルク、1万1マルク以上、というふうに大まかに区分すれば、それぞれのランクが全体に占める比重は、許容枠別（例えば、5万マルク以下、5万1千～50万マルク、50万1千マルク以上）の比重をある程度近似的に表現しうる、ということは認められるであろう。とすれば、ライヒスバンクの割引いた手形の内、正確に半分とは言えないまでも、これに近い分量が、数においてはわずかな大企業（銀行については必ずしも「大」ではないだろうが）から持込まれたものであった、とする推論もあながち不当ではないであろう。

- 1) 一般的に言えば、割引手形の平均残日数（割引から満期までの日数）に対して、割引額は逆比例の、割引残高は正比例の、関係にある。後に見るように、銀行から持込まれる手形の残日数は工業からのそれよりかなり短いので、工業の比重は割引額基準で見たそれより割引残高基準で見たそれの方が高く、銀行業の比重はその逆になる。ちな

みに、1907年12月31日から1908年4月7日の間に満期になったライヒスバンク割引手形の内、70.6%は銀行業から持込まれ、工業から持込まれたのは14.4%にすぎなかった（Die Reichsbank 1876-1900, S. 150）。

- 2) Darmstädter Bank がその正式名称を“Bank für Handel und Industrie”としていたことを想起されたい。
- 3) ロンバード業務の場合、直接取引はかなり限定されていた。工業について言うと、手形割引においてライヒスバンクと直接取引関係にあった企業数は1908年で2万を越えていたが、1909年における工業へのロンバード貸付の件数（9月15日現在）は800余にすぎなかった。Vgl. ebenda, S. 171, 174f. und Die Reichsbank 1876-1900, S. 371.
- 4) 第5表は次の手順で作製されたものである。まず、1903年第2四半期、1905年と1907年の第3四半期のそれぞれの期間中に満期になったライヒスバンク割引手形の7つのランクへの分類が見られる（Die Reichsbank 1876-1910, S. 153）ので、これを年間に妥当する構成とみなし、この構成比を表中の両年のライヒスバンク割引手形の総枚数（ebenda, S. 131）にかけて各ランクの枚数を算出した。次いで、各ランクの平均額はそれぞれのランクを画する数値の平均であるとみなし（200マルク以下は150マルクとした）て、これに各ランクの枚数をかけて各ランクの金額を算出した。最後に1万1マルク以上のランクの金額は、表中の両年の割引総額から、上述の方法で算出された1万マルク以下の各ランクの金額の合計を引いて算出した。

(2) 地域的特性

次にやや視角を変えて、特色あるいくつかの地域におけるライヒスバンクの内国手形割引業務を見ておくことにしよう。そうした地域としては、まず第1に金融中心地たるベルリン、次いで工業地帯としてのラインラントおよびヴェストファーレン、それから農業の比重の相対的に高い東プロイセン、最後に外国貿易の拠点としての自由都市（ハンブルク等）、を選ぶことにする。その根拠は第6表の示すとおりである。

ベルリンでは、ライヒスバンクで手形を割引に付した者の内、実に93%が銀行業に属し、し

第6表 割引依頼者の地域別・業種別比重(%)

	農 業 関 係	工 業	商 業 運 保	銀 行 業			あらゆる 種類の組合
				株 銀	式 行	その他	
ベルリン	—	1.6	3.9	79.0	14.1	1.4	
東プロイセン	2.3	10.6	18.7	26.4	22.3	18.6	
ラインラント	0.5	28.4	11.0	42.7	14.6	0.2	
ヴェストファーレン	0.1	30.9	12.1	31.7	22.0	2.0	
自由諸都市	0.1	2.5	10.9	60.9	21.6	2.1	

注 1) それぞれの地域における割引総額によめる各業種の比重である。
2) 1907年12月31日から1908年7月17日までの間の割引の累計である。

資料：Die Reichsbank, 1876—1910, S. 150f.

かもその内でも 株式銀行の 比重が 圧倒的に 高い。ここではその他の業種の比重はほとんど問題にならないのであって、ベルリンにおいては、ライヒスバンクは勝れて „Bank der Banken” なのである。

ライン＝ヴェストファーレンでは、他地域に比して工業の比重の高さが際立っている。ここではライヒスバンクは、 „Bank der Banken” であるとともに „Bank für Handel und Industrie” でもある。なお、「銀行業」の中味では両地域にやや差異があり、ラインラントでは株式銀行の比重が、ヴェストファーレンでは「その他銀行」の比重が、それぞれ相対的に高い点、留意されたい。

自由都市ではベルリンに次いで銀行業の比率が高いが、商業関係の比重はベルリンよりはるかに高い（ベルリン以外の地域に比して特に高

第7表 ライヒスバンクの手形割引全体に占める各地域の重重と地域別残日数

	平 均		ベルリン		東プロイセン		ラインラント		ヴェストファーレン		自由諸都市	
	残日数	比 重	残日数	比 重	残日数	比 重	残日数	比 重	残日数	比 重	残日数	比 重
1890年	35	16.8	17	2.4	59	13.1	40	4.4	55	11.0	27	
1895年	40	15.2	15	2.4	52	13.1	43	5.1	50	9.5	28	
1900年	33	19.0	12	2.5	58	13.6	45	5.6	56	7.6	21	
1905年	35	19.6	11	2.5	62	13.1	46	5.6	53	6.3	18	
1910年	28	19.9	10	2.3	56	13.0	38	4.5	46	7.6	18	

注 1) 「平均残日数」はライヒスバンク割引内国手形全体の平均値である。
2) 「比重」は各地域で割引かれた手形の額が全国総計によめるパーセンテージである。
3) 各地域の平均残日数は、 $\langle \text{その地域の割引料収入} \times 360 \rangle \div \langle \text{その地域で割引かれた手形の額} \times \text{その年の平均割引率} \rangle$ で算出した。

資料：Ebenda, S. 131 u. 134f.

いわけではない。

最後に東プロイセンでは、「あらゆる種類の組合」の比重が際立って高いが、農業者の比率そのものは絶対的には小さい。そしてここでは「株式銀行」の比重が著しく低いのである。

さて、こうした地域的特性に留意して作製されたのが第7表である。

まず、ライヒスバンクがドイツ全国で割引いた手形の総額に対して各地域で割引いた手形の

額が占める比率を見ると、ベルリンがトップで全国総計の20%近くを占めており（しかもこの比率は増大する傾向にある）、これにラインラントが13%弱で続いている⁹⁾。

次に割引手形の平均残日数（割引→満期）を見ると、これは東プロイセンで断然長く、1895年を除けば60日前後に達している。ヴェストファーレンではこれより10日ほど短く、ラインラントではさらに1週間程度短い。この3つの地

域では平均残日数は全国平均をかなり上回っているが、ベルリンや自由都市では逆に全国平均をかなり下回っており、特にライヒスバンクがベルリンで割引いた手形の平均残日数は10日強と極めて短いのである²⁾。

こうした残日数の地域差は、先に見た地域的特性によく照応している。工業地帯で残日数が長いのは、ここではライヒスバンクが „Bank für Handel und Industrie” として工業等から直接に割引く比率が高いからであり、農業地帯で特に長いのは、そこでは銀行業の発達が著しく遅れているからに他ならない。これに対し

て、ベルリンや自由都市では銀行業がよく発達して、工業や商業の手形割引需要はひとまず銀行によって充たされ、然る後にライヒスバンクに割引に出されるために、ここでは銀行の比重が高くなるとともにライヒスバンク割引手形の残日数は短くなりがちになる。しかもベルリンでは市中割引市場が形成されているのでなおさらライヒスバンクに来る手形の残日数は短いということになるのである。ところで、第7表では割引額基準で各地域の比重を見たが、それは、いわばライヒスバンクに流入する手形量の地域分布であった。しかし、各地域で引出さ

第8表 ライヒスバンク割引手形年平均残高の地域別比重

	全国合計 (A)(千マルク)	ベルリン		ラインラント		ヴェストファーレン	
		残高(B) (千マルク)	$\frac{B}{A} \times 100$	残高(C) (千マルク)	$\frac{C}{A} \times 100$	残高(D) (千マルク)	$\frac{D}{A} \times 100$
1895年	571,355	30,464	5.3	80,916	14.2	37,186	6.5
1900年	773,427	54,043	7.0	145,258	18.8	73,834	9.6
1905年	857,903	53,598	6.3	148,946	17.4	73,384	8.6
1910年	853,798	60,055	7.0	149,605	17.5	61,901	7.3

注：各地域の平均残高は＜その地域での手形の年間割引額＞×＜その地域の手形の平均残日数＞÷360，で算出した。
資料：Ebenda.

第9表 ライヒスバンク割引手形の地域・業種構成（1910年平均残高）

① 各業種の地域構成

	ベルリン		ラインラント		ヴェストファーレン		全国計	
	百万マルク	%	百万マルク	%	百万マルク	%	百万マルク	%
工業	4.0	2.2	57.0	30.8	25.6	13.9	185.2	100.0
銀行業	48.2	9.7	57.6	11.6	23.2	4.7	496.7	100.0

② 各地域の業種構成

	工業		銀行業		全業種計	
	百万マルク	%	百万マルク	%	百万マルク	%
ベルリン	4.0	6.8	48.2	81.4	59.2	100.0
ラインラント	57.0	38.1	57.6	38.5	149.6	100.0
ヴェストファーレン	25.6	41.3	23.2	37.4	62.0	100.0

資料：Ebenda,S. 148f.

れているライヒスバンク信用の規模を知るには、さらに割引残高基準で見なければならぬ。第8表がこれを示す。

ここでは金融中心地たるベルリンと工業地帯たるライン＝ヴェストファーレンだけを挙げてあるが、第7表との著しい差はベルリンに現われている。すなわち、第7表ではライヒスバンクに流入する手形量の2割弱（金額基準）を占めて首位にあったベルリンが、ここでは、手形割引を通じて供与されるライヒスバンク信用の規模の7%弱を占めるにすぎず、もはや首位にはないのである。見られるようにラインラントがこれにとって替わっている³⁾。そして、ラインラントとヴェストファーレンとを合わせると、この重工業地帯がライヒスバンク手形割引信用の規模の実に $\frac{1}{4}$ 前後を占取していたのである。この点を別の角度から見たのが第9表である。

①表が示すように、ライヒスバンクが工業から直接割引いた手形の平均残高の実に45%はライン＝ヴェストファーレンの工業によって占められている。そしてライヒスバンクがライン＝ヴェストファーレンで割引いた手形の平均残高の内、4割弱が工業に由来し、銀行業からのそれと拮抗しているのである（②表）。他方ベルリンでは銀行業が8割強という圧倒的な比率を占める（②表）が、銀行業からライヒスバンクが割引いた手形の平均残高に対しては1割弱を占めるに留まって、ラインラントに及ばない（①表）。

そこで今度はベルリンの銀行業からの割引とラインラントの銀行業からのそれとを1910年について比較してみる⁴⁾と、ベルリンの銀行業はライヒスバンクが割引いた手形の約18%を持込んだにもかかわらず、ライヒスバンク割引手形平均残高に対しては約6%を占めるにすぎず、ラインラントの銀行業は同じく約7%を持込んで同じく7%近くを占めているということがわかる。ということは、同じ銀行業からの割引と言っても、ベルリンの銀行から持込まれる手形の残日数は、ラインラントの銀行から持込まれる手形のそれよりもかなり短い、ということに他ならないのである。

- 1) この1・2位は、ライヒスバンク統計で区分されている20の地域全体に妥当する順位である。
- 2) ロンバード貸付の平均残日数はどの地域でも一般に短縮する傾向にある（ベルリンでは1895年の19日→1910年の9日、ラインラントでは同39日→同9日）。Vgl. Die Reichsbank 1876-1910, S. 178-189. なお、ロンバード貸付の平均日数は、 $\langle \text{その地域のロンバード利子収入} \times 365 \rangle \div \langle \text{その地域の貸付額} \times \text{その年の平均ロンバード利率} \rangle$ で算出した。
- 3) ちなみに、ロンバード貸付では、ベルリンが20%程度——年によって大巾に変動する——を占めて首位にある。工業地方の比重はベルリンに及ばないが、次第に増大してゆく傾向にある。Vgl. ebenda, S. 178-183.
- 4) 第6表が1910年にも妥当すると仮定しての比較である。

以上の検討によって明らかになったことの要点を摘記すれば、次のとおりである。

- (1) ライヒスバンクの割引いた手形のうち、
 - ①約70%が銀行業から、約15%が工業から持込まれた（1910年）
 - ②約2割はベルリンで、2割弱がライン＝ヴェストファーレンで割引かれた
 - ③ベルリンでは9割以上が銀行業から持込まれ、ライン＝ヴェストファーレンでは、約55%が銀行業から、約30%が工業から持込まれた
- (2) ライヒスバンク割引手形平均残高の内、
 - ①銀行業が6割弱（1905年の5割弱→1910年の6割弱）を占め、工業は2割強（同3割弱→同2割強）を占める
 - ②ライン＝ヴェストファーレンが $\frac{1}{4}$ 前後を占め、ベルリンは7%弱を占める
 - ③ライン＝ヴェストファーレンでみると工業が約4割を占め、銀行業と拮抗している（この地方の工業は全国全業種合計の約1割を占め、ベルリンの全業種合計より多い）
 - ④工業で見るとライン＝ヴェストファーレンが全国計の約45%を占める（1910年）
 - ⑤銀行業で見ると、ライン＝ヴェストファーレンが全国計の約16%を占めるのに対し

て、ベルリンは10%弱を占めるに留まる(1910年)

(3) ライヒスバンクが割引いた手形の平均残日数は、

①全国平均の35日に対して、ベルリンでは11日、ライン＝ヴェストファーレンでは約50日であった(1905年)

②銀行業からの手形ではかなり短く、工業からのそれではかなり長い

③同じ銀行業でも、ベルリンの銀行から持込まれた手形における方が、ラインラントの銀行業から持込まれた手形におけるよりかなり短い

(4) ライヒスバンク割引手形の

①枚数で見ると、400マルク以下の小口手形が総枚数の半分を占め、1万1マルク以上の大口手形は総枚数の3%強を占めるにすぎない

②金額で見ると、1万1マルク以上の大口手形が総金額の約半分を占め、400マルク以下の小口手形は総金額の5%前後を占めるにすぎない、と推測される

(5) ライヒスバンクの設定した手形割引許容枠で見ると、

①最上位ランクたる50万1千マルク以上の枠を得ている企業は圧倒的に工業と銀行業において数が多い

②おそらく、ライヒスバンクが割引いた手形の内半分程度は、50万1千マルク以上の許容枠を得ている企業から持込まれたものであろう。

〔Ⅲ〕 ライヒスバンク割引手形の 質的構成

これまでの考察を通して我々は、言わばライヒスバンク信用の流れる経路と方向、それぞれの方向における流れの速さと太さと流量、といったものを知った。しかし、ライヒスバンクの手形割引業務ないしはそれを通じて供与されるライヒスバンク信用の意義を解明するために

は、さらに、同行の割引く内国手形の質的構成を明らかにしておくことが必要である。けれども、ライヒスバンクの公式統計は、同行の割引いた内国手形の質には留意しておらず、単に同地手形(Platzwechsel)と送達手形(Versandwechsel)とを区別して集計しているにすぎない。ここに、同地手形とはその支払がそれを割引いたライヒスバンク支店の営業区域(Bankbezirk)内で行なわれる手形のことであり、送達手形とはその支払がそれを割引いたのとは別の支店の営業区域内でなされる手形のことである。この限りでは、かかる区分は便宜的なものであって、我々の意図するところに沿うものとは見えないが、ともかくも、ライヒスバンクの割引く内国手形の質的構成を知る公式統計資料上の手掛はこれしかない¹⁾のであるから、とりあえずこの区別に従って考察を進めてゆかざるをえないのである。

1) ライヒスバンクの割引く手形の質については、Willi Prion, Das deutsche Wechseldiskontgeschäft, 1907, に詳細な記述がある。これは後に関説されるであろう。

(1) 同地手形と送達手形

まず、同地手形と送達手形とがライヒスバンク内国手形割引残高に占める比率から見よう(第10表参照)。

第10表 ライヒスバンク割引手形平均残高構成

	送 達 手 形		同 地 手 形	
	百万マルク	%	百万マルク	%
1890年	271	51.3	258	48.7
1895年	261	45.6	311	54.4
1900年	338	43.7	435	56.3
1905年	311	35.5	565	64.5
1910年	373	43.7	481	56.3

資料：Ebenda, S. 126 u. 218

1890年までは送達手形残高が同地手形残高を上回っていたのであるが、1891年以降これが逆転して、見られるように1905年には同地手形残高が送達手形残高をはるかに上回ることとなった（同地65：送達35）。この状態は1908年まで続いたが、1909年以降再び逆転して、今度は送達手形残高の比重が増大していった。

そこで次に同地手形と送達手形のそれぞれの平均額と平均残日数を見ると、第11表のようになっている。ライヒスバンク割引手形の平均額は、同地・送達を問わず、総じて増大する傾向にあるが、同地手形は、1枚あたりの平均額でも、平均残日数でも、送達手形のそれらをかなり上回っている。特に平均残日数で言えば、送達手形のそれは短縮する傾向をはっきり示しているのに対して、同地手形にはそのような傾向は見られず、このため、両者の平均残日数の差

第11表 割引手形の平均額と平均残日数

	同 地 手 形		送 達 手 形	
	平均額 (マルク)	残日数	平均額 (マルク)	残日数
1890年	2,383	50	1,512	27
1895年	2,391	55	1,335	30
1900年	2,500	49	1,704	23
1905年	2,568	53	1,568	22
1910年	2,609	42	1,841	19

資料：Ebenda.

は拡大する傾向にあったのである¹⁾（1890年には両者の差は23日であったが、これが1905年には31日になった）。

ところで、第7表で見たように、ライヒスバンクがベルリンで割引いた手形の平均残日数は1905年で11日であったが、W. プリオンによると、この年ライヒスバンクがベルリンで割引いた同地手形の平均残日数は21日であり、送達手形のそれは9日であった²⁾。そうすると我々は、簡単な連立方程式によって、ベルリンにおける同地手形割引と送達手形割引の構成比を知ることができる。すなわち、ベルリンにおいて1905年にライヒスバンクが割引いた手形の内、

$x\%$ が同地手形であり、 $y\%$ が送達手形であったとすると、

$$x + y = 100$$

$$21x + 9y = 11 \times 100$$

という式が得られるのであって、これを解くと $x=17$ 、 $y=83$ である。つまり、ライヒスバンクが1905年にベルリンで割引いた手形の内、約83%が送達手形であり、約17%が同地手形であった、ということである。この数値は、全国平均から相当偏倚している。1905年は、ライヒスバンク割引手形に占める同地手形の比率（割引額基準）が最も大きかった年で、この比率は43.1%、送達手形の比率は56.9%であった。然るに、ベルリンでの比率は今見たとおりなのである。ということは、第7表で見たベルリンでのライヒスバンクの割引手形の残日数の短さは、そこで述べたようにベルリンでは銀行業からの割引の比重が著しく高いからでもあるが、同時に、ベルリンではライヒスバンクの割引く手形の大半が送達手形だからでもある、ということの意味し、さらに、逆に言えば、ライン＝ヴェストファーレンでライヒスバンクの割引く手形の平均残日数が長いのは、商工業からの直接割引の比重が高いからでもあるが、同時に、そこでライヒスバンクの割引く手形がより多く同地手形だからでもある、ということの意味するのである。

いったい、同地手形と送達手形とを区別するものは、支払地の遠近でしかなかった。だが、同地手形割引と送達手形割引との上述の如き際立った対照性は、単なる支払地の遠近からは生じえないものである。なぜなら、割引依頼者の取扱う手形は一部は同地手形であり他の一部は送達手形であるが、彼が、支払地の遠い手形は満期口近くまで所持しておいて然る後にライヒスバンクに割引に出し、支払地の近い手形は満期までに相当の日数を残したままでライヒスバンクに持込む、等々、といった具合に両者を使い分けるべき理由は何一つ存在しないからである。にもかかわらず現に支払地の遠近によって著しい差が生じているのであって、ここに、支

払地の遠近は手形の質的差異と一定の対応関係を有するであろう、ということが当然予想されねばならない。次にこれを検討しよう。

- 1) 表では1910年における 同地手形の平均残日数が42日に短縮し、送達手形のそれとの差も23日に縮まっているが、1908年では同地手形の残日数は50日あり、両者の差は29日あったのである。 Vgl. Die Reichsbank 1876-1910, S. 126 u. 128.
- 2) Vgl. Prion, a. a. O., S. 125.

(2) 商業手形と信用手形

まずライヒスバンクの割引く内国手形の種類を確認しておけば、次のようである¹⁾。

①商業手形

大企業の振出手形および引受手形は、その大部分が市中銀行に吸収されるが、一部はライヒスバンクに持つ振替勘定預け金の維持などのために直接ライヒスバンクに持込まれる。

中規模企業の取扱う商業手形は、一部は市中銀行に吸収されるが、他の一部はライヒスバンクに直接持込まれる。多くの場合中規模企業はライヒスバンクと市中銀行の両方に經常勘定をもっており、一方で不足すると他方に信用供与を求めるのである。「ライヒスバンクの商業手形割引の重点はこの手形材料の中位の質にある」²⁾。

小企業の取扱う商業手形はたいてい割引適格性を有しない。

②信用手形

「信用手形の主要構成部分をなすのは、商業および工業によって振出された銀行引受手形である。」³⁾そして銀行引受手形⁴⁾の圧倒的部分は市中割引業者に吸収される。残日数の長い内にライヒスバンクに持込まれるのは、比較的小さな銀行の引受手形である。

主として小銀行が顧客宛に振出して自ら割引いた手形や商業手形形式をとった融通手形も、残日数の長い内にライヒスバンクに持込まれる。

③再割引手形

「専らあるいは主として自己資本で営業している銀行または個人銀行」⁵⁾が持込む手形は、その外観においては中規模企業からのそれと区別がなく、かつ最大限可能な残日数を持っている。

これに対して「自己資本の他に他人貨幣、預金で以て営業する銀行」⁶⁾は、できるだけ残日数の短い、利子控除の少ない手形をライヒスバンクに持込む。ただ地方銀行の場合には時に「平均して一ヶ月までの」⁷⁾残日数を持つ手形をライヒスバンクに持込むことがある。

④組合手形

大部分が直接ライヒスバンクに持込まれ、しかもその残日数は最大限可能な長さである。

さて、以上のようなライヒスバンク割引手形の種類と同地・送達という手形の区分とは、いかなる関係を有するのであろうか。

既述のように、同地手形と送達手形とを分ける基準は、その手形の決済がそれを割引いたライヒスバンク支店の営業区域内で行われるか否か、ということであった。ところが、ドイツ全体は97の営業区域に分割されていたのであって、個々の営業区域はほぼ都市単位の（あるいはせいぜいそれに周辺地域を加えた）極めて狭いものだったのである⁸⁾。とすれば、産業企業の商業取引の内、このような狭い区域内に限定される部分は区域間に亘るそれよりもかなり少ないはずである——もっとも、ライン＝ヴェストファーレンのような産業企業の稠密度の高い所では、例えばベルリンに比べると、同一区域内取引の割合は相対的に大きいであろう——から、商業手形は、それが産業企業およびこれから割引いた銀行によって持込まれるか同地内の市中割引市場を経由してライヒスバンクに至る限りでは、ヨリ多く送達手形として現われるものとみなしてさしつかえないであろう——ライン＝ヴェストファーレンでは、商業手形にして同地手形として現われる比率は相対的に大きい

であろう——。これに対して信用手形は——たいてい同地内の銀行と産業顧客との間に発生する⁹⁾のであるから——、それが振出人から直接ライヒスバンクに持込まれるか同地内の市中割引市場を経由してライヒスバンクに至る限りでは、たいてい同地手形として現われる（組合手形も同断）。しかし、勿論このような限定の内に包含されうる範囲は、地域によって大きく異ならざるをえない。そこでこの点をベルリンとライン＝ヴェストファーレンについてみれば、次のようになる。

まずベルリンでは、送達手形の比重が著しく高くなる。なぜなら、ベルリンの諸銀行（特に大銀行）は、自行の地方支店や地方の諸銀行からの再割引によってその地方の手形を絶えず吸収するからである（しかもこの場合、吸収される手形が商業手形に限らないことは言うまでもない）。その上、「ラインラントとヴェストファーレンの産業の多くは大銀行の固定的な顧客層に属しており、それらがその地域の銀行の引受手形を極めて豊富にベルリンで割引くので、そうした手形は（ベルリン大銀行が割引く）主要手形 *Primapapiere* の相当かなりの構成部分を成している。」¹⁰⁾（カッコ内は引用者）。こうして、ベルリンでライヒスバンクが割引く送達手形の内には、信用手形が少なからず含まれることになる。

他方、ライン＝ヴェストファーレンでは、そうでなければ送達手形として現われるはずの商業手形の良質な部分がベルリンに吸収されるので、元々少なかった送達手形の分量がさらに少なくなるばかりでなく、残された商業手形は——その質の低位性ゆえに——満期日までになおかなりの日数を残したままライヒスバンクに持込まれがちなので、ライヒスバンクがここで割引く送達手形の残日数は比較的長くならざるをえない。また、そうでなければ同地手形として現われるはずの信用手形もその良質な部分はベルリンに吸収され、残された信用手形は——その質の低位性ゆえに——早々にライヒスバンクに持込まれるので、ライヒスバンクがライン

＝ヴェストファーレンで（とりわけ個人銀行の比重の高いヴェストファーレンで）割引く同地手形の残日数は著しく長くならざるをえない。

かくして、上述の如き地域的偏差はあるにしても、また、同地手形における商業手形と信用手形との比は何対何であり、送達手形におけるそれは何対何である、というふうに量的に正確に認定することはできないとしても、同地手形と送達手形との際立った差異を現出させる程度において、同地手形の「主要」内容は信用手形（別ても銀行引受手形）であり、送達手形の「主要内容」は商業手形である——特にライン＝ヴェストファーレンでそうである——、ということの確認されうる¹¹⁾。そして、ともかくもここから、先に同地手形割引の特質として明らかにされた諸点は実は信用手形割引の特質に他ならず、送達手形割引の特質として検出された諸点は実に商業手形割引の特質に他ならないということ、また、その場合同地手形イコール信用手形でなく送達手形イコール商業手形でないために、信用手形割引と商業手形割引のそれぞれの特質は幾分ボヤケたままで捉えられているということ、が結論されうるのである。そこでこのような視点から前出の第11表を見直せば、次の諸点が明らかである。

- ①商業手形割引の場合、小口手形の割合が大きく¹²⁾、しかも満期間際になってライヒスバンクに持込まれる。これは、商業手形が、支払手段（特に期末決済資金）の入手¹³⁾や単なる取立てのために、主として銀行から持込まれるということである。
- ②信用手形割引の場合、比較的大口の手形の割合が大きく、しかも振出されて間もなくライヒスバンクに持込まれることが多い。そしてこれは、いわゆる経営資本 *Betriebskapital*（賃金支払・原材料購入・利子や配当の支払等に充用される資本）や設備資本 *Anlagekapital* の調達（割引依頼者が産業企業の場合）または貸付資金の調達（割引依頼者が銀行の場合）のための手段であるという信用手形の本質に由来しているのである。

この②の点については、次のような指摘がある。

「信用供与に関して、コッホ（1908年までの数年間のライヒスバンク総裁）は、特に退職後、彼がこの点でしばしばあまりに譲歩しすぎ、ライヒスバンクのポートフォリオに繰延手形や融通手形を非常に多額に甘受した、という非難を受けた。実際、ライヒスバンクの短期の割引信用は、非常にしばしば、あらゆる種類の永続的な投資 Anlage のための資金を調達するために高い程度において要求された。」¹⁴⁾ (G. オプスト) (カッコ内は引用者)

「(1908年に開かれた銀行調査委員会 Banken-quete で) ライヒスバンク総裁は……、ライヒスバンクは、その手形割引において、これまで以上に、正当な営業手形 Geschäftswechsel すなわち経済的に正当な・可動的な手形の受取りに自らを限定するつもりである、と約束した」「そしてそれは言葉の上だけではなかった。同地手形残高は1907年の6億8100万マルクから1910年の4億8000万マルクへ低下した」。¹⁵⁾ (A. ヴェーバー) (カッコ内は引用者)

もっとも、こうした点については、それが大銀行なり大企業なりに特徴的なことではなく、ほとんど専ら中規模以下の銀行なり企業なりに該当する事態である、ということが注意されねばならない。すでに述べたように、ベルリン大銀行や地方大銀行の引受手形は、もしライヒスバンクに持込まれることがあってもそれは満期間際なのが通例であって、ライヒスバンクの割引業務において問題になりうる信用手形は、ほとんど専ら中規模以下の銀行、とりわけ小銀行段階でのそれなのである¹⁶⁾。

1910, S. 22)。このため銀行引受手形は二様の機能を持つことになった。一方ではそれは商業手形機能を代行する。すなわち、商品の購入に際して商業手形のかわりに銀行引受手形が渡される場合がそれである。ところが、独占形成と結びついて現金支払が普及してくると、商品の買い手は購入に先立って銀行引受手形を入手しかつこれを割引に付し、かくして手に入れた資金で購入の際に現金支払をなすようになる (Vgl. Prion, a. a. O., S. 120)。ここまではまだ商業流通という地盤をとにかくも持っているが、それでもすでに「純粹の融通手形」と半ば重なっている。そして商業流通という地盤から完全に離れ去ったとき、銀行引受手形は信用手形となる。ドイツにおいて銀行引受手形が急速に普及したのは、この後の方の機能ゆえであった (Vgl. Karl von Lumm, Die Stellung der Notenbanken in der heutigen Volkswirtschaft, 1909, S. 15f.). Vgl. hiermit noch Brenninkmeyer, Der Akzeptkredit der Banken, 1916.

5) Prion, a. a. O., S. 136-137.

6) Ebenda, S. 137.

7) Ebenda, S. 138.

8) Vgl. Die Reichsbank 1876-1910, S. 4f.

9) 長い残日数を持ったままライヒスバンクに持込まれる信用手形は「たいいていの場合、同じ地域に住む人々の裏書をもっている」。Vgl. Prion, a. a. O., S. 145.

10) Ebenda, S. 180.

11) Vgl. ebenda, S. 146.

12) W. プリオンは、送達手形に小口手形が多く含まれているのは、①信用力ある生産者と最小の消費者との直接取引の増加、②比較的大きな企業の広範な業務関係のゆえであるとしている。Vgl. ebenda, S. 124.

13) 「Mitteldeutsche Kreditanstalt の取締役モムゼンは、同行が、その現金在高を、決して準備金としてではなく、日々の払出のための手持金 Handgeld としてみている、ということを数年前にはっきりと認めた。そして比較的大きな銀行がしばらく前から公表している2ヶ月報告は、銀行が期日のさしせまった正常な現金手段需要によって条件づけられるより高い現金在高を維持しようとしなない、ということを実際に証明している。ベルリンの大銀行は、通例月末に、すなわち大きな支払日の前夜に、彼らの債務の平均して3%しか現金および他行預け金で用意していない。そして、このパーセンテージのうち、少なからぬ部分が、銀行がライヒスバンクにおいておかねばならず、支払目的に利用されえない、固定的な最低預

1) Vgl. Prion, Das deutsche Wechseldiskontgeschäft, S. 119ff.

2) Ebenda, S. 120-121.

3) Ebenda, S. 129.

4) 銀行引受手形は「初めは外国貿易と結びついて導入されたが、国内取引においても純粹の融通手形 finance bill としてもポピュラーになった」(P. B. Whale, Jointstock Banking in Germany,

け金に属する。」(Alfred Lansburgh, Die Maßnahme der Reichsbank zur Erhöhung der Liquidität der deutschen Kreditwirtschaft, 1914, S. 11.)「1910年の合衆国通貨委員会でのドイツとフランスのさまざまな商業銀行家の証言によれば」「かれらは、それぞれの中央銀行が、必要な場合には適格手形をつねに自由に再割引するだろうという信頼(おそらくかれらの過去の経験にもとづく)によって、比較的小さな債務準備率で業務を遂行することができたと論じた。」(A. I. ブルームフィールド『金本位制と国際金融』(小野一郎・小林龍馬共訳)日本評論社, 1975年, 32ページ)。

14) Georg Obst, Das Bankgeschäft, Bd. II, 1914, S. 528.

15) Adolf Weber, Depositenbanken und Spekulationsbanken, 1915, S. 37-38. Vgl. hiermit noch Die Reichsbank 1876-1925, 1. Teil, S. 25.

16) これは一部はライヒスバンク支店指導者の Jagd auf Wechsel に起因する。S. ヘランダーは「1904~1907年にライヒスバンクは公然と手形狩をした」と述べている(Vgl. Sven Helander, Das Zurückgehen der Bedeutung der Zentralnotenbanken, S. 188)し、J. プレンゲは「ライヒスバンク支店 Reichsbankstelle が、我々が毎月の賃金貨幣の一定部分を流通期間90日の銀行引受手形で調達するよう圧力をかけている、というのは本当である」という産業会社の証言を引用している(Vgl. Johann Plenge, Von der Diskontpolitik zur Herrschaft über den Geldmarkt, 1913, S. 99-100.)。

む す び

以上我々はライヒスバンクの内国手形割引業務に立入った分析を加えてきたのであるが、その結果検出されたライヒスバンクの手形割引業務の諸特徴は、「ドイツ金融資本成立期におけるライヒスバンクの信用構造」は「二層構造」をなすものとして把握されなければならない、ということを示している。

ライヒスバンクは „Bank der Banken” であるとともに „Bank für Handel und Industrie” でもあった。だが、それは、単純にライヒスバンクの二つの側面を表わすのではない¹⁾。 „Bank der Banken” としてのライヒス

バンクと „Bank für Handel und Industrie” としてのライヒスバンクとの間には、ドイツ資本主義の歴史的規定性に根ざす断層が存するのである。

„Bank der Banken” としてのライヒスバンクは、「激成された近代的金融資本関係」²⁾ に立脚してはじめて成立している。基幹産業における資本の集中・そしてこれを楨杆とする生産の集積は、「工業に対する信用関係」の新たな展開(=固定資本信用としての交互計算信用の供与→証券《株式・社債》の発行によるこの流動化・回収)によって加速されたのであるが、かかる「工業に対する信用関係」の新たな展開そのものは、ベルリン大銀行が、銀行=資本集中を通じて——とりわけ地方銀行の集中・支配を通じて——「バンク・コンツェルン」³⁾ を形成し、これによって自らを近代的銀行たらしめることによってはじめて確立されたのである。それは、他面では社会の遊休貨幣資本のベルリン大銀行への集中=集積の過程であり、ベルリン大銀行による基幹産業大株式会社への貨幣資本の集中的配分体制確立の過程に他ならない。しかもこの場合、ベルリン大銀行はベルリン金融市場において流動性拠点を有しており、ライヒスバンクはこれに対する「最後の貸し手」として機能する。金融資本関係の下ではじめて、ライヒスバンクはベルリン大銀行による金融市場支配を補完しかつ支持するものとして、中央銀行として、「銀行の銀行」・「最後の貸し手」として存在しうるのである。

だが、一方における近代的金融資本関係の激成は、他方において必然的に、生産・流通・金融の各分野に広範に中小経営を存続せしめ⁴⁾、そこに深刻な資本不足=「信用飢饉」を現出せしめずにはいない。 „Bank für Handel und Industrie” としてのライヒスバンクは、金融資本的發展から取残されて、否むしろ近代的金融資本関係の激成ゆえに「信用飢饉」に見舞われざるをえない、かの中小経営に対する「社会政策」の内に、その成立根拠を持つ。ここでは、ライヒスバンクは信用銀行の代替物=「最

初の貸し手」として機能するのであって、中小経営の貨幣取引を媒介するとともに、これとの不可分な関係において中小経営に信用を供与するのである⁵⁾。

こうして、ドイツ金融資本成立期におけるライヒスバンク信用構造の二層性は、ドイツ資本主義の歴史的規定性の集約的表現たる「二つのドイツ」⁶⁾のライヒスバンクへの投影に他ならない。

- 1) W. プリオンや S. ヘランダーなどの同時代人たちが、ライヒスバンクの手形割引業務を市中銀行のそれとの競争関係において把え、「ライヒスバンクの地位低下」論を唱えた基底には、彼らがライヒスバンク自身における“Bank der Banken”と „Bank für Handel und Industrie”との対立を意識しえなかった時代状況が横たわっている。Vgl. W. Prion, Das deutsche Wechseldiskontgeschäft, S. 153ff. und S. Helander, Das Zurückgehen der Bedeutung der Zentralnotenban-

ken, S. 185ff.

- 2) 生川栄治「金融資本の形成」(『講座信用理論体系』Ⅲ, 日本評論社, 1956年所収), 162ページ。
- 3) 同前, 164ページ参照。
- 4) 大野英二『ドイツ資本主義論』未来社, 1965年 161-162ページ参照。
- 5) 固より, „Bank der Banken”としてのライヒスバンクと „Bank für Handel und Industrie”としてのライヒスバンクとは、同じライヒスバンクの内にあって和解しあえる関係にはない。それゆえにまた、一方に中央銀行としての純化の要請があると同時に他方には「社会政策」的要請がある。前出のコッホに対する非難や Bankenquete 1908-1909等で展開された同時代人たちの論争も、この相容れない二つの要請をめぐるそれとして理解される必要があろう。
- 6) かかる表現の含蓄については、松田智雄『新編「近代」の史的構造論』ベリカン社, 1968年所収の「ドイツ精神の後進性」・「エビローグ 二つのドイツ」を参照されたい。

[1979年5月11日脱稿]